

仏 の 願 い

平成 30 年 西雲寺だより 秋号 (56 号)

 **報恩講のご案内** 

10 月 17 日 (水) ~ 19 日 (金)

17 日 お逮夜(2:00~) お初夜(7:00~)

18 日 お日中(10:00~) 大逮夜(2:00~) お初夜(7:00~)

19 日 満日中 (9:30~)

法話 加賀 日下 賢城師

(18 日お日中より)

——18 日はバスが出ますのでご利用下さい——

放送会館前発(8:50)~東別院前~工大温泉前~西安居經由
坪谷発(9:00)

常森発(9:00)~国見~鮎川~小丹生經由

ご本山参拝 日帰りバスツアーのご案内

裏面 (6 ページ) をご覧下さい。

親鸞聖人のご生涯とその教え

愚禿の精神

現代を生きる苦悩

平成という時代を終えるに当って、世の中は大きく変わりました。IT産業や人工頭脳の時代となり、また経済中心の世の中となってお金さえあれば何でも手に入れることができるようになりました。そして医学の進歩もあり、人間は九十歳まで、長寿の人は百歳まで生きられるようになったのです。

しかし、今日は少子高齢化で、農村や山間部で過疎化が進み、家族や地域社会のつながりも薄くなり、不安や孤独をかかえて生きることになったのです。

経済中心の世の中となり、より一層豊かで便利な世の中になったことは結構なことですが、私たちの価値観まで大きく変わってしまったように思われます。世の中がどのように変わっても、私たちは老・病・死するのちを生きていきます。老・病・死の苦悩は変わりません。しかし、私たちは現実的になり、生きる意味を問う宗教心までも薄くなってしまったような気がします。

そして、人間に対する価値観も、その人は一体何ができるかという、その人自身の能力によって評価されることになりました。人間をできるかできないかという能力で評価することは、それぞれが持っている個性を無視することになるのではないのでしょうか。現代を

生きる者の苦悩は、自分が自分であるより他にありやうがないにもかかわらず、自分が自分であることができないとこです。個性として生きたいと思うほど十把一からげの個性でしかないものになっていくのです。

現代という時代は、この自分が自分であることができず、一生懸命生きても生きたことにならず、社会や家族において深いつながりを生きたいと思ってもかなわず、孤独感のなかに生きているのが私たちではないのでしょうか。

親鸞聖人というお方

親鸞聖人は、今から八百年程前の平安末期から鎌倉時代を生きられた方ですが、時代は変わっても、今日とあまり変わらない生きることの不安や虚しさをかかえて生きる、当時の民衆と共に仏道を歩まれたお方です。聖人のおことばに「みな、いし、かわら、つづてのごとくなるわれらなり」とありますが、当時の人々は権力者から抑圧され、しいたげられ差別されて生きていたのです。そのような人々に親鸞聖人は「おまえもそうか、私もそうか」「私もそうだが、あなたもそうではないか」といつも苦しみや悲しみを共にして生きていかれたのです。そしてそのように生き方のなかから、苦しみや悲しみをしっかりと受けとめて、実りゆく満ち足りた人生を歩む道が、既に仏の方から教えとして開かれているんだよと語りかけていて下さっているのだよと、そのような人生は、「本願にめざめた「愚禿」という自覚のところを開けてくるんだよ」といわれるのです。

愚禿（ぐとく）ということ

「愚禿」というのは、おろか。おろかというの、ものを知らないということではあります。そんなことではないに、知っていることはこの上もなく知っている場合だってあります。入学試験を受ければトップで合格する、クイズグランプリに登場すれば三日間勝ち抜いて、ヨーロッパ旅行をすることができるといっても、それによって自分の生活が真に実りゆく生活として営むことができるような、そのような根拠となりうる知識であるかどうかという、そうはいかない。そのようなものがあればあるほど、よけいにぎすぎすするような、そのような知識であるならば、真の知識とはいえません。

蓮如上人が「一文不知（いちもんふち）の尼入道なり」というとも、後世（ごせ）をしるを智者とす」といわれたような意味での一文不知の尼入道、しかし実は、愚が愚であることを知ることによって開かれるような真の智慧というものがそこに開かれてきたということですから、そのように開かれてきたものは、私が賢くてなどという、「私の」というようなもの、くつつくような余地のない、つまり私というものをもちだす余地のない世界なのです。

『末灯鈔』に

他力と申し候うは、とかくのはからいなきを申し候うなり

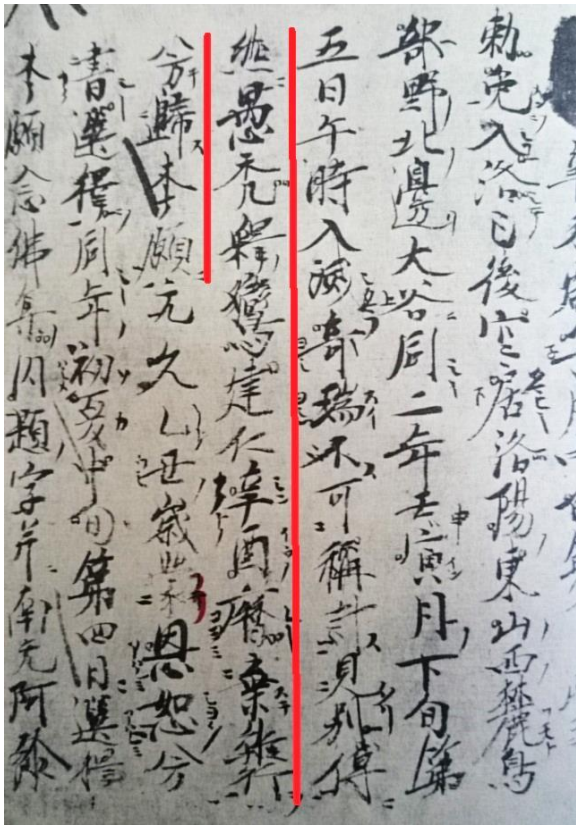
と、「愚禿」のおこころを述べておられますが、はからいのない世界、如来のご本願によってはからわれていく世界です。

雑行を棄てて本願に帰す

親鸞聖人三十五歳の時、比叡山や奈良の仏教、当時の国家権力によって、吉水の法然上人の専修念仏教団が解散させられました。そして法然上人は土佐の国、親鸞聖人は越後の国へ流罪になりました。それ以後、親鸞聖人はご自身を「愚禿釋親鸞」と名告られるようになったのです。

親鸞聖人は九十歳でおなくなりになるまでいろんな著作をされておられますが、その多くには「愚禿釋親鸞集」と書かれています。また『歎異抄』のあとがきには「流罪以後、愚禿親鸞と書かじめ給うなり」と記されています。しかし、その愚禿の名告りのもととなるのは、『教行信証』の「後序」の文です。

然るに愚禿釋の鸞、建仁辛の酉の曆（けんにかのとのとりのれき）、雑行（ぞうぎょう）を棄てて本願に帰す



親鸞聖人直筆（教行信証・坂東本）

と述べられています。「建仁辛の酉の曆」というのは、親鸞聖人二十九歳の時です。二十年間比叡山でご修行された親鸞聖人が、その比叡山を下りて吉水の法然上人のもとに行かれた。そして法然上人にお会いすることによって、聖人に明らかに道が開かれた。その自らに明らかに道が開かれた喜びを「建仁辛の酉の曆、雑行を棄てて本願に帰す」とお述べになつたのです。本願によって雑行を棄てしめられた、それは本願によって愚禿ということが親鸞聖人に明らかになつたということ、雑行の雑といふことはまじりけのあること、どれだけ厳しい修行をしても自力の執心を離れることができないならば、それは雑行といわれるのです。お念仏でも称えるところに自力の計らいがあれば雑行です。私たちはお念仏申すにつけても自力の計らいを離れ、如來さまのお計らいのままにお念仏申させていた

はからいなき世界

他力と言うは如來の本願力なり

『教行信証』

他力と申し候うは

とかくのはからいなきを申し候うなり

『末灯鈔』

「愚の自覚」ということは、如來の本願によって照らし出され、自己が破られてみると、己をもちだす余地など全くないということ、そこにはただただ如來の本願力を仰ぐ以外に我なしというのちの世界を賜われるのです。にもかかわらず、その本来の世界のど真ん中に身を置きながら、どうしても自分というものをもちださなければおれない、それが私たちのありようです。親鸞聖人は

凡夫というは、無明（むみやう）煩惱われらがみにみちみちて、欲もおおく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころおおく、ひまなくして臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえずと、水火二河のたとえにあらわれたり

『一念多念文意』

と仰せになつておられます。これが我われのです。このどうしても己をもちださずにおれないという、私たちの何ともいえない寂しさや孤独感のところ、如來のご本願が響いて下さるのです。そして己をもちだす余地のない「とかくのはからいなき」世界に触れさせていただくのです。

（住職）

福島の被災地の 子供たちを招きました



早朝 5 時半のお鐘つき



朝ご飯の前に必ずお参りしました



きれいに並んで寝たはずが…

永代経が つとまりました



武周の方々が草刈りをしてくださいました

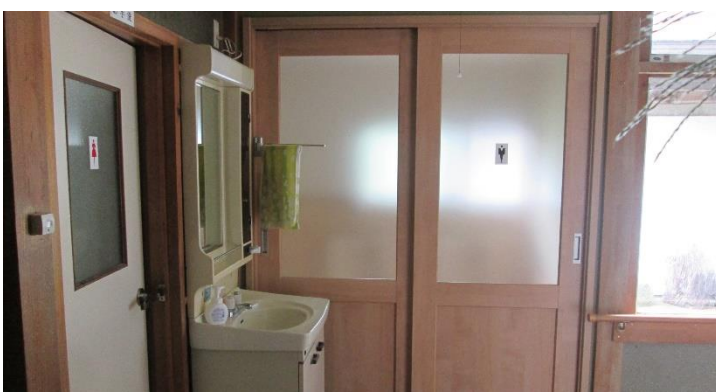


10時からお日中。法話は佐々木大円師



お参りありがとうございました

玄関横のトイレを男女別にしていただきました



男性用の入り口を新設しました
これまでの入り口は女性専用となります



便器など使えるものは流用しています

報恩講によせて

親鸞聖人は弘長二（一二六二）年十一月二十八日、九十歳のご生涯を終えられました。『御伝鈔』には十一月の下旬より体調をくずされて床につき、それより世間のことは口にせず、ただ仏恩の深いことをお述べになつて、お念仏申しておられました。そして二十八日正午頃、ついに念仏の息がたえましたと記されています。

親鸞聖人のご一生は、幼くしてご両親とお別れになられ、三十五歳のときには越後にご流罪となり、晩年は長男善鸞さまを、異議をとなえたかどで義絶されるなど、波乱にみちたご苦勞なものでした。そのようなご苦勞とおし、いよいよ本願を仰ぎ、お念仏のまことを生きたのです。

その親鸞聖人のご苦勞を偲ばせていただくとともに、「どうかお念仏申してお浄土を願って生きよ」と願ひ続けていて下さる親鸞聖人にお会いさせていた

だくのが報恩講です。
 弥陀の本願信ずべし
 本願信ずるひとはみな
 撰取不捨の利益にて
 無上覚をばさとするなり

『正像末和讃』

山門掲示板

私たちが
一人一人の
業において
仏法に
出遇せて
いたゞくので
ある

南無阿弥陀仏は無碍光如来といわれます。あらゆるものに碍げられることなく至り届く光としての仏さまです。純粋な光そのものは色も形もなく見ることはできませんが、物にあたれば、その物が光ることによって光の存在を知ることができます。例えば宇宙へ行けばどんなに太陽に近くても真暗闇です。しかしそこに人工衛星が飛んでいけば、ピカッと光ります。光を碍げるものがあれば光るのです。それと同じく如来さまの光は私たちの業がどのように重くても、さまざまに妨げられることなく光を放ち、その光のなかに撰め取って下さっているのです。私たちは久遠劫来、業をつくり罪を犯して迷ってきたのです。私たちは智慧がなく、自分の業に目覚め引き受けていくことはできませんが、如来さまが引き受けて下さっているのです。

仏は衆生の宿業を通して、我等を見出し出して下さる。我等は宿業を通して仏を念じ、仏は宿業を通して我等を招喚し給う。（曾我量深）

本山 御正忌報恩講 参拝旅行のご案内

日 時 平成30年11月26日（月）日帰り

日 程 早朝、各地を巡回（国見→殿下→西安居→市街地→福井IC）

午前は、佛光寺本廟（納骨所）に参拝
昼食は、佛光寺本山の白書院にて
午後は、佛光寺本山 御正忌報恩講 参拝
夕方、本山発、夜に福井着（各地を巡回）



費 用 旅費1000円・参拝懇志4000円（当日で結構です）

帰敬式 おかみそりも受けられます（お一人2万円です）

交 通 大型バス1台

申込み 西雲寺（0776-97-2138）

もしくは在所の世話方さんまで連絡下さい

締切り 10月31日（定員約40名です）

持ち物 お数珠、輪げさ、お経本（イスはあります）

※ご不明な点は遠慮なく西雲寺までお尋ね下さい

※お申し込みいただきましたら、詳しい日程などをお知らせいたします。

にぎやかに参り

いたしましょう！

お申し込み

お待ちしております！



昨年の本山御正忌参拝旅行にて

発 行

真宗仏光寺派 専念山 さい うん じ 西雲寺

住職 護城一寿

筆頭総代 末定育雄

編集責任者 護城一哉

〒910-3523 福井市武周町5-2

電話 0776-97-2138

メール kmgojo@mx3.fctv.ne.jp

ホームページ <http://arukou.net/>

次世代の方、分家された方に！

お寺から郵送いたします。どうぞ
ご遠慮なくお申し出下さい。

みなさんの声 大募集！

原稿や作品はもちろん、ご意見、
ご感想など、どしどしお寄せ下さい。
郵送でもメールでも構いません。お
待ちしております。